追悼　山口巖先生

ことばを味わい、哲学する——山口巖先生の思い出

郡　伸哉

〈ことばの哲学者〉——これが、わたしが山口先生にたいして抱いていたイメージだ。このイメージについてすこし書いてみたい。

わたしは山口先生を 1980 年代から存じあげてはいたが、より近くで接したのは、1993 年にロシア中世文学の泰斗リハチョーフが京都を訪れたとき（中村喜和氏が京都に案内された折、南禅寺のそばの湯豆腐料理屋での歓談のあと、先生が無鄰菴の庭園に案内された、そのときにご一緒させていただいた）、それから何年かのち、わたしの勤務先の大学で学生むけ講演をしていただいたとき（内容的類型学の考え方をかみくだいて話していただいた）、そしてとりわけ 2003 年から 2010 年ごろのあいだ、類型学研究会に参加させもらったときのことである。

学生むけ講演のときもそうだったが、先生はよく身近なものを話の糸口にされた。たとえば「机」や「椅子」。そうしたことばから頭に浮かべるものは、われわれから独立した客観的存在だとおもうかもしれないが、そうではない、それは人間の精神活動がうみだしたもので……。こんなぐあいに、ことばと認識・思考の不可分な関係を確認しながら話を進められた。こうしたスタイルは、鳥取環境大学に勤めておられたときの講義ノート『人とことば』(2004) などにもみつけることができる（ちなみに、そのころ先生は、環境言語学についても多数の文献を読みこんでおられるときいた）。

しかし上のようなことは一例であって、初心者相手でなくても、なにかを説明するとき、おなじように、つまり〈ことばとはなにか〉という原点にそのつど立ちもどって考えるかのようにかみくだいて、というか、かみしめるごとく語られたようにおもう。そうしたことに接するうち、わたしは先生に〈ことばの哲学者〉という名をひそかにつけた。

あるとき先生から、学生時代に、慶応の井筒俊彦の言語哲学の講義（だったと記憶する）をうけたとき、（さきほど書いたような）ことばと認識をめぐる考え方にはじめて出会って衝撃をうけたとおききした。「衝撃」だったか正確にはおぼえていないが、そういう強い表現だった。そして『類型学研究』創刊号・第 2 号で展開する「時間観念の発生」をめぐる思索。〈ことばの哲学者〉のイメージは、わたしのなかで強まって

いった。

今回、主要著書を読みかえして、このイメージはまちがっていなかったと感じている。たとえば『類型学序説』(1995) と『パロールの復権』(1999) は、まったく異なる内容をあつかっている。後者はソシュールとそれ以後の言語学理論、さらに文学理論・言語美学を対象とし、ことばを「機能」の観点からとらえようとしたプラーグ学派、それ以前に同様の認識に達した、あるいは近づいた人たちに照明をあてている。この 2 冊の成果を、幅のひろさのあらわれというのは簡単だけれど、ではこれらはどうつながっているのだろう。

『パロールの復権』の第 1 部「序論」では、はじめのほうの 20 ページをフンボルトにあてている。それを読むと、先生において「類型学」的な探究と「パロール」のへの注目がおなじ根源に発していたことがよくわかる。その根源とは、ひとことでいうならフンボルトが述べた思想――言語とはエルゴン（作品）ではなくエネルゲイア（活動性）である――になるのだろう。わたしなりに理解したところでは、それは人間の精神がなんらかの目的をめざしてはたらくところ、そこに活動性＝はたらきとしての言語がなりたち、そこから、一方で、目的をめざしてはたらく言語の「機能」、ひろくはパロールの扱いへの関心がうまれ、他方で、精神のはたらきが個々の言語のしくみにどうあらわれるかを考えるときに「類型」の探究がはじまるということだろう。『類型学序説』の第 1 部第 3 章にも同様のことが書かれている。

機能の研究も、類型の研究も、こうした原点をとくに意識せずにすすめることはできるが、先生はいつもこの原点を意識していたのだとおもう。『ロシア中世文法史』(1991) にも、この原点と、そこからわかれる二方向への視線があらわれている。個々の文法理論の内容を詳細に検討すると同時に、言語事実にむかう文法家たちの姿勢と思考、さらに社会とのかかわりをふくめた彼らの生涯にも（情報がのこされているかぎりで）ふれている。とりわけ 18 世紀ロシアの多面的学者ロモノーソフに、社会的な伝達と認識の手段としての言語という考えかた、つまりは機能的な言語観の萌芽があったと述べられているのは興味ぶかい。

わたしの抱いた〈ことばの哲学者〉のイメージを、いまあらためて意味づけてみるなら、こうした〈精神のはたらきとしてのことば〉という原点につねにたち、ことばへの関心をせまい領域に限定せず、論理をつきつめつつ、ことばを味わう人、と説明できるだろうか。

言語学以外の分野では、レフ・グミリョーフのユニークな「パッショナールノスチ」（環境とのかかわりのなかからうまれる、民族をつき動かすエネルギーのようなもの）

の理論がおもしろいといっておられたことも、幅の広さと理論というものへの関心という点で印象深かったが、ここでは、ことばの芸術、文学への関心について書こう。先生はよく、ロシア文学におけるプーシキンという存在の大きさを、ロシア語を学ぶ過程で直観したことを話された。またチェコの作家クプカの小説を 2 冊翻訳されている（『カールシュタイン城夜話』2013、『スキタイの騎士』2014）。その内容は歴史への関心にこたえるもので、訳注も充実し、翻訳の過程で相当の調べをされたと推測される。いちど 19 世紀末にチェコで出版された百科事典を先生にみせていただいたことがある。当時からのチェコの学問水準の高さを教えてくださったものとおもうが、あれも駆使されたのだろうと想像する。

先生はむかし、チェコに留学することがきまっていたのに、出発直前に「プラハの春」のチェコ事件のために断念せざるをえなかったとおききした。チェコにたいする思いはこの翻訳にもこめられているだろうと自然と想像され、実際、『カールシュタイン城夜話』のあとがきにも書いておられる。著者のフランティシェク・クプカ（画家とは同姓同名の別人）については、訳者解説以上のことはわからないが、訳された 2 冊は、おもに歴史を題材にした、詳細なディテールで紡がれた創作で、重厚な作風といえるとおもう。一方、文学全般にたいする先生の見方は保守的で、チェコの作家でも、たとえばクンデラなどについては否定的だった。

クプカの 2 冊に収められた作品は、たいていは西のヨーロッパとのかかわりのなかでのチェコの過去を題材としている。つまり、たんにチェコの栄光ということでなく、ヨーロッパの文化の重要な一部としてのチェコということだろう。作家はそれを、みずからつくりあげた虚構のなかでかみしめ、いとおしむかのようである。

そんななかで、『スキタイの騎士』の最後におさめられた同名の一篇は、チェコのはるか東方をあつかって異色だ。チェコ生まれの主人公は、古典文献学を学び、考古学へ軸足をうつし、スキタイを研究する。やがてロシアに行き、発掘に携わり、2400 年前のスキタイの騎士の骨を発見する。しかしジョージア（グルジア）人の血をひく妻をタタール人の男（スキタイの騎士に重ねられる）に奪われた彼は、一切をすてて、バイカル湖、極北、極東の厳しい自然のなかで狩猟と放浪の年月をおくり、最後にはイルクーツク大学で考古学の教授となる。こうした数奇な体験が、その場その時の細かなディテールをともない、ロシア革命という時代背景にもふれながら、一人称で語られる。べつに主人公と先生を重ねようというわけではないが、西の過去（古典文献学、ギリシア語・ラテン語）から、東の現在（ロシア、ロシア語）へ、その深い過去（スキタイ研究、紀元前の遺骨の発見）へ、そしてさらに東の広大な空間（シベリア・

極東、狩猟と放浪）へと時空を横断し、事物と出来事をつぶさに体験すること――邯鄲の夢のごとく 40 ページで展開するこうした架空の人生は、ことばや文化を学ぶものにとっては、想像のなかでのひとつの理想の境地かもしれない。こうした楽しい想像の世界に遊んだことも、先生をめぐる思い出につながっている。

わたし自身は、ここ 15 年ほどロシア文学を素材に、文学研究と言語研究のあいだに位置するようなことにとりくんでいるが、そのきっかけのひとつは、類型学に出会ったことだった。もともと文学や文化の理論、とくにバフチンの小説のことばの理論や、V. V. イヴァーノフ、V. N. トポローフたちの（言語学とつながりのある）文化記号論などに関心があったこともある。またそれらをうみだしたソビエトの学問的背景が内容的類型学と無縁ではないということもある（イヴァーノフについていえば、類型学的研究にも携わり、ガムクレリーゼとともに大著『インド・ヨーロッパ語とインド・ヨーロッパ人』も書いている）。しかしなによりも、いまのわたしには、文学テクストのなかに〈ことばのはたらき〉をさぐりだすことが純粋に楽しい。そしてそういうテーマで書くようになったのは、類型学に接したころからだった。いまだ十分に理解していないものの、内容的類型学、ひろくいえば言語研究のなかに存在するダイナミックな思考の鉱脈、そして具体的な〈ことば〉のなかに〈精神のはたらき〉をさぐりだし、味わう楽しみ――それを山口先生から教わったとおもう。